論説

スピノザにおける個物の意味（下）

――スピノザ研究（九）――

今井仙一

八

わたしの手許に『ソヴィエト哲学におけるスピノザ』と表題された一冊の英書がある。ソ連邦における七篇のスピノザ研究を選んでこれを英訳し、それにかなり詳細な「序論」を附したもので、訳編者はクラインである。*その中の一篇にブルシュリンスキーの「スピノザの実体と有限諸物」**がある。わたしはつぎにその内容を一瞥することとしたい。

* *Spinoza in Soviet Philosophy*, by George L. Kline, 1952.

** V. K. Brushlinski, Spinoza's Substance and finite Things. ――これは雑誌「マルクス主義の旗の下に」, No. 2-3 (1927), pp. 56-64 に載せられたもので、比較的短い論文である。

ブルシュリンスキーは、はじめにまず、スピノザの展開したものが壮大な一元論であり、また神あるいは実体の内在の学説であったにも拘らず、しかもそこには、実体とその諸様態との間、無限と有限との間、存在と不可離に結合された本質とそして必然的存在を含まない本質との間、永遠不変なる存在者を理解する直観とそして個々の短命な諸

物を対象とする表象との間に、一つの明らかな裂け目 break、あるいは一種の不一致 discrepancy の存すること、しかし同時に、スピノザのうちには、この裂け目あるいは不一致の弁証法的な超克の努力が見られることを指摘する。

さて、ブルシュリンスキーその人はソ連邦の哲学者として弁証法的唯物論の立場に立つ。ところでこの立場によれば、物質はただそれの具体的な諸顕現あるいは諸変容の内にのみ在り、そしてただ後者を通じてのみ知られるのであって、決してそれ自身において在り、それ自身を通じて知られるのではない。いまこれをスピノザに移して考えるならば、右に言われた物質にあたるものは実体である。そこで問題は、スピノザの実体についてもまた右と同一のことが言われるのではなかろうか、である。

さて、スピノザの定義によれば、実体とはそれ自身の内に在り、それ自身によって思念されるところのものであった。即ち実体の概念は他のあらゆる概念から独立に形成されることができるのである（『エティカ』第一部定義三）。それに反して様態は、他者、即ち実体のうちに在り、かつその他者、即ち実体を通じて思念されるところのものであった（定義五）。そこからしてスピノザは、実体は本性上それの諸変容、即ちそれの諸様態にさきだつもの prior と考えたのであった（第一部定理一）。

そのようにスピノザは実体と様態とを区別すると共に、諸様態はただ唯一の実体たる神の内にのみ在り、かつただ神を通じてのみ思念されうるという点を反復して強調した（たとえば第一部定理一五及び二三の証明において）。しかし彼は、その裏にあたる命題、すなわち神はただ諸様態の内にのみ在り、後者なしには思念されえないということを何処にも直接に語ってはいない。かえって反対に、スピノザの神はどこまでもそれ自身の内に in se 在り、かつ、それ自身によって per se 思念されるところのものであった。その限り右に物質とその諸変容とについて言われた関係は

スピノザの実体と諸様態との間には存しないかと思われる。しかし実はそうではない。なぜならスピノザには無限なる実体と有限なる諸様態との間の裂け目あるいは不一致を弁証法的に超克しようとの試みを示す様々の徴候が見られるからである。かくてブルシュリンスキーは語る。「この際何よりもまずスピノザが第一部定理一六において方式化しそして彼自身反復的にそれを指示しつつ力説した思想を強調することが必要である。それは即ち、『神的本性の必然性からして無限に多くのものが無限に多くの仕方において（すなわち、無限なる知性の対象たりうるすべてのものが）帰結〔生起〕せねばならない』という定理である。この定理の意味するところは、実体からしてその諸様態のすべてが、かくて無限様態と同じく有限様態もまた（なぜなら有限様態もまた無限なる知性、すなわちその思惟のうちに無限数の物を包含する知性、の対象でありうるから）つねにかつ必然的に帰結する、――そしてこれら様態のすべては、帰結しないことがそれらにとって全く不可能であるほどそれほどの絶対的必然性をもって実体から帰結する、ということである。このことは、実体はそれの諸様態なしには不可能であることを意味する。すなわち、我々が最初に強調したスピノザの定義によれば、実体はただそれ自身の内にのみ在るのではあるが、しかしそれにも拘らず、実体はただその諸様態においてのみ顕現するのである、それら様態は必然的に実体から流出し、そして、実体の必然的結果として、本質上実体とは不可分離的なのである。第一部定理三三は、実体の諸様態はそれが実際に帰結したのと別の仕方で実体から帰結しえなかったことを証明している。*もし諸様態の本性と秩序とが現実に在るところと異なるものであったとすれば、実体の本性そのものがそれの在るところと異なるものでなければならないであろう。スピノザ自身右の定理の証明でそのように語っているのである。さらに第五部定理二四において彼は、唯一の実体の諸変容としての個物の学説からの一つの直接的な結論を引き出している、それは、実体とその諸様態との間の必然的な統一と不可離の結合とをいま

一度改めて語るところの結論である。いわく、『我々が特殊な諸物を理解することが多ければ多いだけ、それだけより多く我々は神を理解する**』。

* 第一部定理三二は「諸物はそれが現に産出されたのと異なるいかなる他の仕方によっても、またいかなる他の秩序においても、神によって産出されることをえない」である。

** *Spinoza in sov. Philos.*, pp. 122-3.

ついでブルシュリンスキーは、スピノザが第一部定理一五の註において言及した線と点との関係をとりあげ、一定の延長あるいは長さを有つ線分といかなる延長をも有たぬ点とは、その本性においては全く異なるものでありながら、しかも相互に一は他を予想するところの相関的両極者たることを明らかにしたあとで、つぎのように語っている。「スピノザによれば、そのような相関的両極の関係が無限の実体とその有限なる諸様態との間にも見られる。一つの非延長的な点（そして一つの点は非延長的と考えられねばならない）は、いわば、一つの空間的ゼロである。なぜなら、ゼロが数の下限であると同様、一つの点は一つの線の下限だからである。従って、たとえいかほど多くの点を寄せ集めたとしても、しかも我々は決して最小限の長さの一線分をも獲得することをえないであろう。一つの線分は諸々の点の単なる機械的集合以上のあるものであり、性質的にそれとは異なるものであるからである。かくて、あたかも一つの線分がたんにそれを構成する諸点の総計ではないと同じく、スピノザの実体は有限な諸物のたんに機械的な集合ではないのである。無限なる実体とそれの有限なる諸様態とは、それらの本性あるいは性質によって、原理的に異なっている。けだし、実体は一であり、無限、不可分、不滅であり、すべての物を包容し、そしてただその内部からのみ決定されているのに反し、有限な諸物は多であり、限界づけられており、可滅的であり、そして究極においては諸物の集

合全体によって決定されており、ただ専らそれら自身の内的本性あるいは本質によってのみ決定されているのではないからである。しかし原理におけるこの差異、実体と諸様態との間のこの対立は、その両者が、相互に一は他を予想し、一は他を制約するといった一つの緊密かつ不可分な結合のうちに存在することを妨げはしないのである。要言すれば、両者は、線と点と同様に、本質上相関的両極者であるのである*」。

* *ib.*, p. 125.

ついでブルシュリンスキーは本質と存在との関係の問題を取りあげてつぎのように語っている。「本質と存在との関係の問題は無限と有限との関係の問題と直接に結びついている。スピノザによれば、我々はただ実体においてのみ本質と存在との統一を有っている。諸様態の場合には本質と存在との間にある種の裂け目が存在する。しかし、この裂け目はただ我々がある特殊な様態を孤立的に考察する場合にのみ生ずる点に注目することが必要である。だが、もし我々が自然の全体の秩序（'ordo universæ naturæ,' 第一部定理一一の第二の証明）、あるいは、すべての原因の秩序（'ordo causarum,' 第一部定理三三、註一）、あるいはすべての物の連結（'rerum concatenatio,' 第一部附録）を取りあげるならば、その時我々は、単にその本質に従ってのみならず、さらにその存在に従ってもまた、各個物の完全な定義を獲得するのである。なぜなら各個物の存在とこの存在の連続とは、あたかも三角形の諸特性が三角形の本質から帰結すると同様に必然的に普遍的世界秩序からして帰結するからである。その場合の唯一の差異はこれである、いわく、三角形の本質を理解することは困難ではない、それは完全に我々の力のうちにある。だがしかし、有限な存在として我々は、諸物の完全な構造、原因と結果との無限なる秩序全体、を認識的に包容することをえないのである。そこからして当然、或る物は我々にとってたんに偶然的と思われる、実際にはそれらは厳密に必然的であるにも拘らず。か

くて我々は我々の思想において諸物の存在をそれら諸物の本質から分離し、かくて個々の有限な物を非存在的と想像することを得るのである。ただし、唯一の実体のみは、すべての実在の内在的原因ならびに全体性として、存在するとしてでなければ我々によって思念されることをえないのである*」。

* *ib.*, pp. 125-6. ――このあとでブルシュリンスキーは『形而上学的思想』*Cogitata Metaphysica*, Part II, ch. 9, par. 2 からスピノザのつぎの言葉を引用している。いわく、「しかし人々は彼らの無知の故に諸々の物においてさまざまの差別を作り出す。もし人々が自然の全秩序 totum ordinem naturæ を明晰に理解しえたならば、彼らはあらゆる物がちょうど数学において取り扱われる物と同じだけ必然的であることを見いだすであろう。しかしこれは人間の知識を超越するので、我々は或る物をたんに可能的であって必然的ではないと判断するのである」。

つぎにブルシュリンスキーは第一部定理二一―二三（さきの**二**を参照）とそして同じく第一部定理二八（**三**および**五**を参照）との間には決して人のしばしば指摘するような矛盾の存しないことを主として定理二八の証明（**三**を参照）にもとづいて明らかにし、そして神的本性はたんに無限な仕方でのみ変容されるものではなく、さらに有限な限定された仕方においても変容されることを指摘したのち、スピノザの神あるいは実体は一体いかなるものか、それは有限諸物の世界から絶対に切断されたものであるであろうか、と質疑し、そしてそれに対してつぎのように語っている。「スピノザの実体は、それの統一性、法則とのそれの適合性、それの絶対的充実性の観点から捉えられた世界全体である。スピノザが能産的自然という言葉で特徴づけたものがそれに外ならない。それとは区別されたものとして、所産的自然は、この場合、それらの多数性と分離性との観点から捉えられた諸個物の総体を意味する。では能産的自然と所産的自然とは相互にいかに関係するのであろうか。最も道理にかなった答えは、両者は本質上一にして同じき物の二つの様相 two aspects of one and the same thing である、というにあると思われる。もっとも、スピノザ自身はつねに必

ずしもこの見解を一貫せず、かえって彼の諸定理はかなりの程度まで能産的自然を所産的自然から分離する傾向を示してはいる。（中略）。しかしそれにも拘らず、一元論的傾向はスピノザにおいて支配的であり、そして、いずれにしても、彼の哲学の最も貴重な、かつ最も興味のある業績はまさにこの傾向のうちにこそ見いださるべきなのである*」。

* *ib.*, pp. 128-9. ――このあとでブルシュリンスキーは、第一部定理一五の註におけるスピノザの言葉、すなわち「水は、それが実体である限りにおいては不可分的であり、生産もされず破壊もされない。しかしそれが水である限りにおいては可分的であり、そして生産されかつ破壊される」を引用し、そしてつぎのように語っている。「かくて、一にして同じき有限の物が、スピノザによって、あるいは一つの個体的な有限様態として、あるいは一つの単一の、不可分の、無限の実体の顕現として見られているのである」。

最後にブルシュリンスキーは、実体と個物、あるいは無限者と有限者との間の以上のような緊密な関係にも拘らず、しかも前者から後者への漸次的変形といったものはありえず、両者の関係はどこまでも弁証法的な相関にすぎないことを注意したのち、つぎのように語って彼の論文を閉じている。いわく、「スピノザの実体の弁証法的本性はまさしくつぎの点に存する、いわく、それは必然的にそれ自身のうちに有限諸様態の一つの無限系列を予想 presupposes し、そして或る意味ではこの系列によって全く汲み尽くされる entirely exhausted のであると*」。

* *ib.*, p. 130.

九

スピノザによれば実体とはそれ自身の内に在り、それ自身によって思念されるところのものであった。では我々は一切の特定諸状態、一切の諸様態を全く抜きにした純粋な実体なるものを思念しうるであろうか。いわゆる所産的自

然を産出する以前の能産的自然、比喩的に言えば世界創造以前の神を考えることができるであろうか。あるいはa、b、c、等々の作品を全く抜きにして一人の画家Aの創作能力について語りうるであろうか。いわば一枚の画をも描かない画家、一篇の詩をも作らない詩人について、彼らの天才を讃美することができるであろうか。

否である。かえって画家Aの天才はただ彼の諸作品と相即して初めて存在しかつ思念されるのであり、能産的自然はただ所産的自然と相即して初めて存在しかつ思念されるのである。そのことを右にブルシュリンスキーは「実体はそれの諸様態なしには不可能である」とか、「様態は本質上実体とは不可分離的である」とか、または「能産的自然と所産的自的とは一にして同じき物の二つの様相である」とか、あるいは「実体は必然的にそれ自身のうちに有限諸様態の一つの無限系列を予想し、そして或る意味ではこの系列によって全く汲み尽くされる」とかいった言葉で表現したのであった。わたしはブルシュリンスキーのこうした見解に心から同意せざるをえない。

わたくしはかってつぎのように語ったことがある。「神あるいは能産的自然は万物の生産力として永遠にして一なる原理であり、それに対して所産的自然は時間的に生起する多なる個物の世界である。しかもこの両者は二つの別のものではない。なぜなら『在るものはすべて神の内に在る』(Eth. I. pr. 15) のであり、そして神はいわゆる内在的原因 (causa immanens) として、それの生み出したすべてのものを自己の内に包容する無限の自然だからである。すなわち『一即多』であり、『一即一切』である。『スピノザ哲学のほかにいかなる他の哲学もない』"Es gibt keine andere Philosophie als die Philosophie des Spinoza." と語るまで深くスピノザに傾倒したレッシングが、スピノザの根本思想を『一即一切』"ἓν καὶ πᾶν." の一句に要約し、そして『私はこれ以外の何ものをも知らない』と語ったのも、そのことを指したものに外ならない」。*

＊『政治思想における抵抗と統合』、日本政治学会年報、一九六三年岩波書店刊、三一―三二頁。

一即一切、一切即一、――われわれはスピノザ哲学を理解する場合、つねにこの根本的直観を忘れてはならない。わたしがさきに(**三**の終りにおいて)「乱暴な言い方をすれば、神即個物、個物即神と言われてもいい一面がある」と語り、そして**四**の終りにおいて、「しかし世界ならびに世界内の一切の個物が神の何らかの属性に即しての神の様態あるいは表現と見られる限りにおいては(もっとも、ただその限りにおいてのみではあるが)、右の神即個物、個物即神がある程度の妥当性を有することは否定されることをえないであろう」と語ったのも、そうしたスピノザの根本的直観に立脚しての発言であったのである。

さきに(**一**において)見られたように、フィッシャーは、神と世界、あるいは能産的自然と所産的自然とを、一、対立の形で捉える見方、二、直接的統一の形で捉える見方、三、前者から後者への何らかの推移を想定する見方、の三つをすべて謬まった解釈として排斥し、そして彼自身は、神の世界に対する関係は諸属性の無限なる諸変容に対する(すべての個物の総体に対する)関係に外ならず、そしてそれは、根拠の、それの必然的かつ永遠なる諸帰結に対する関係と同一であると考えた。また、「能産的自然は永遠の原因、所産的自然は永遠の結果である」とも語った。根拠と帰結、原因と結果とが、互いに一は他を予想し、かくて不可離の関連において在るものである限り、フィッシャーもまた神と世界とを一即一切、一切即一の形で捉えようとしたのであり、そしてその限り彼の見方は十分に正しい見方であったと言えるであろう。

また、さきに(**六**において)見られたように、フロイデンタールは有限様態すなわち個物の存在と活動について「二重の因果性」を指摘した。それによれば有限な個物の最近原因は同じく有限な個物である。即ち有限性はその本性上

有限性に依存する。しかしながら有限性の全体そのものは無限者によって運動させられるのであり、かくて諸個物の巨大なる連鎖全体のうちには神的な実体が生き生きと働いているのであり、その意味で神は存在し活動する一切の個物の第一原因あるいは内的原因であると言われる。そこからしてフロイデンタールは、「したがって真の認識は、我々が一切の物において永遠に同じきものとして現われる神的な存在を、確固たる諸真理を、個々の物のうちに書き留められた永遠の諸法則を、探究する場合に初めて獲得されるのである。これを要するに、神は世界の統一であり、世界は神の表現である。神は自然の力であり、そして自然は多性のうちに自らを顕現する神である」と語ったのであるが、そこにも一即多、多即一のスピノザ的直観の示唆されていることは疑われないであろう。

さらにまた右に（七において）見られたように、ウォルフは、スピノザ哲学の本来的な基底はすべての個物の緊密な結合性、あるいは相互依存性への洞察であり、この洞察にもとづいて初めてスピノザは、すべての個物はたんに一にして同じき実体の諸様態であるにすぎないとの彼の中心的思想に到達したものと考えた。その際しかしウォルフは、「神の力は彼の本質そのものである」という第一部定理三四を重視し、そこからして諸個物の相互依存性は根拠と帰結との静態的な論理的関係ではなく、かえって原因と結果との動態的な力関係である点を強調した。かくてウォルフは「固定的な、没運動的かつ没活動的な存在は一つとして存しない。すべての物は神の力から派生すると共に、すべてはまた神の力を分有し、したがって常に不断に活動しつつあるのである」と語り、また「能産的自然とは一切のものを創造し、運動せしめ、かつ指導する宇宙的な力以外の何ものでもない」と語ったのであった。そこにも我々は一即一切、一切即一のスピノザ的直観の示唆されているのを看取せねばならないであろう。

同様にロスは第一部定理二九の註（さきの**五**を参照）を引用してつぎのように語っている。「かくて能産的自然は原

因として理解された神であり、所産的自然は結果として理解された神である。両者はたんに論理的に異なるのみであってそれ以外の差異を有するものではない。それらは一にして同じき無限の全体であって、それが、或るいは過程として、あるいは成果として考えられたものにすぎない*」。

* Leon Roth, *Spinoza*, London 1929, p. 78.

同様にリディア・ソーもまた実体の有限諸様態に対する関係は維持的原因 sustaining cause の関係であるとみなし、フロイデンタールの「二重の因果性」を連想させるような見解を示しつつ次ぎのように語っている。「すなわち宇宙は諸部分の相互連結的な一体系であり、それら部分の各々はある他の部分によって決定される、しかしすべての部分は一括して全体そのものの本性によって決定され、かくて神はたしかにすべての物の原因ではあるが、しかし各々の物はある特殊の物をそれの原因として有するのである。一つのアナロジーを用いるならば、呼吸、消化、等々を維持するものは人体の全有機的組織であるが、動脈を通じての血液の一つの特殊な流れの原因たるものは心臓の一つの特殊な鼓動である。神は、彼の属性・延長の下にあっては、延長のすべての有限様態の維持的原因であり、属性・思惟の下にあっては思惟のすべての有限様態の維持的原因である。維持的原因としての神は能産的自然であり、有限諸変容の体系としての神は所産的自然である*」。

* Ruth Lydia Saw, *The Vindication of Metaphysics*, A Study in The Philosophy of Spinoza, London 1951, p. 82.

ヘーゲルがスピノザ哲学を無世界論 Akosmismus を名づけたことはわたしが本稿の冒頭において言及した通りである。『哲学史講義』においてもヘーゲルは語っている。いわく、神と有限者（そして我々人間もまたこの有限者に属する）との関係は三つの異なる仕方において考象されることができる。第一に、ただ有限者のみが存在し、かくてただ我々

のみが存在する、しかし神は存在しない。これが無神論である。ここでは有限者が絶対的と考えられ、従って実体的なものとされているのである。第二、ただ神のみが存在する、有限者はいかなる実在性をも有たない、それはたんなる現象にすぎない。つぎに第三、神は存在しそして我々もまた存在する。ヘーゲルによればこれは謬まった綜合的結合であり、友好的な妥協である。しかし哲学はこうした素朴な二元論にとどまることを許されない。ではスピノザの立場はどれであったか。ヘーゲルによればそれは右の第二であった。かくてヘーゲルは語る。「スピノザが神を世界、有限者、から区別しないという点から見れば、彼の理論を無神論と名づけることは正しいであろう。なぜなら、スピノザによれば、自然、人間精神、個物は特殊な諸形態のもとに啓示された神であったからである。（中略）。しかしもしスピノザが、彼は神を世界から区別しないという理由のためだけに一人の無神論者と呼ばれるとすれば、それはこの言葉の誤用である。スピノザ主義はまさにそれと同じだけ、あるいはそれよりもより以上適切に、無世界論と名づけられて然かるべきである。なぜならその学説によれば、実在性および恒常性がそれに帰せらるべきは、世界、有限存在、宇宙、ではなくして、むしろただ実体的なものとしての神のみであったからである。世界として知られるようなものは存在しない、世界はたんに神の一つの形態であるにすぎず、即且対自的には無である、かくスピノザは考えた。世界はいかなる真の実在性をも有たない、そして我々が世界として知るところの一切のものは一つの同一性の深淵の中に投げ込まれたのであった。したがって有限な実在といったものは存しない、それはいかなる真理をも有さない、スピノザによれば存在するものは神であり、そしてただ神のみであったのである」*。

* *Hegel's Lectures on the History of Philosophy*, 前出, vol. 3, pp. 280-1.

わたしはいつか機会を得てヘーゲルのスピノザ観をある程度まとまった形で考察したいと思っている。したがって

今ここではヘーゲルの右の見解を批判することは控えておきたい。ここでは単に、さきに（一において）見られたように、フィッシャーが無世界論としてのスピノザ解釈を謬まったものとして斥けたことを想起すると共に、フロイデンタールのつぎの言葉を深い同意をもって引用するにとどめておきたい。いわく、「世界は神である、しかしそれは神の他の一側面なのである。世界の統一性、世界の根源力は神である。諸物の多性、特殊な諸現象形態は世界である。我々が統一としては神と呼ぶもの、それを我々は多としては世界あるいは自然と呼ぶのである。従って我々は両者に対して『自然』Natura という同一の言葉を使用する、ただしさきの場合には能産的自然 Natura naturans として、あとの場合には所産的自然 Natura naturata としてである。即ちさきの場合には活動する力 wirkende Kraft として、あとの場合には活動を受ける原因 gewirkte Ursache としてである。スピノザが世界の諸物をその内在的原因 causa immanens としての神性に関係づけ、そして全自然をたんに神的存在の他の側面としてのみ考察した限り、スピノザはたしかに自然主義者 Naturalist と呼ばれてよい。しかし、自然の諸物は、神がそれらの内に活動するが故に存在するのである限り、決して単なる幻像ではなく、また死物でもなく、したがってまたスピノザはいかなる無世界論者 Akosmist でもないのである」*。

* Freudenthal, *Die Lehre Spinozas*, 前出, S. 134.

一〇

第一部定理三四によれば、神の力 Dei potentia は彼の本質そのものであった。一切の有限な個物はすべて神の何らかの属性の特定諸状態として何らかの仕方でその内に神の力を宿すものと考えられるのである。そこをさしてウォ

ルフは、「すべてのものは神の力から派生すると共に、すべてはまた神の力を分有 teilhaben し、したがって常に不断に活動しつつあるのである」と語ったのであった（さきの七を参照）。スピノザの著書には「分有」という言葉はあまり見当たらない。しかし少なくとも一つの個所においてスピノザは語っている、「我々はただ神の指示によってのみ行動し、かつ神的な本性を分有する……divinæque naturæ esse participes」（第二部定理四九の註）と。*

* participes は「を分有する」といった風によりも、むしろ「に関与する」といった風に訳された方がいいのかも知れない。ウォルフのいう teilhaben についても同じことが言われよう。しかし私自身は「分有」という言葉の方により多くの魅力を感ずるので、あえてこれを取ったわけである。しかしそれは決してすべての個物が神の部分であるかに誤解されてはならない。この点に関してはさきの四を参照されたい。

わたしはかってつぎのように語ったことがある。「ドイツの神学者モスハイム Mosheim は『宗教冒瀆者』スピノザを批判して、『この世界は神である、などとマジメに語る以上にバカげたことがあるだろうか。ウサギ、犬、そして蚊までが神の分肢 Glieder Gottes である。これ以上笑うべきことがあるだろうか』と語ったそうである。しかしスピノザの見方からすれば、ウサギや犬や蚊の中にも何らかの程度において神あるいは自然の力は宿されているのであり、それゆえにこそ彼らはそれぞれ彼ら特有の仕方で存在しかつ活動することをうるのである」。*

* 『政治思想における抵抗と統合』、日本政治学会年報、前出、三三頁。

さて、あらゆる個物は神の力を分有する。神の力はまた神の生命と呼ばれてもよい。ところでスピノザによれば、生命の本質は自己の存在に固執しようとの努力、いわゆる自己保存の努力のうちに存する。かくて第三部定理四にいう、「各々の物は、それ自身の内に在る限り、その存在に固執することに努力する」と。この努力は「物自身の現実的本質に外ならない」（同部定理七）と考えられ、そこからして、「自己保存の努力 conatus sese conservandi は物

の本質そのものである」（第四部定理二二の証明）と言われる。

この思想は初期のスピノザから晩年のスピノザにかけて終始一貫して見いだされる基本的な思想の一つである。かくて例えば彼の最も初期の著述『短論文』の第一部第五章は「神の摂理について」と題されているのであるが、その中で彼は語っている。「摂理 Voorzienigheid とは、我々にとっては、我々が全自然および諸々の特殊な物において見いだすところの努力、彼らの存在の保存と維持とを目ざすところの努力、以外の何ものでもない」と。けだしスピノザによれば、いかなる物も、それ自身の本性からして、自己の自滅を求めることはありえず、かえって反対に、あらゆる物は、自己自身をその状態のうちに維持しかつ改善しようとの努力をそれ自身の内に有することは明らかだからである。スピノザはこうした自己保存の努力のうちに一切の物を生産した神即自然の摂理あるいは配慮をみとめたわけである。この摂理にスピノザは一般的と特殊的との二種類を区別した。一般的摂理とは、「あらゆる物が、全自然の一部分である限りにおいて、それによって生産され維持されるところの摂理」であり、それに反して特殊的摂理とは、「あらゆる物が、自然の一部分ではなく、かえって一つの全体とみなされる限りにおいて、自己の存在の保存に対して有するところの努力」である。*

* *Opera* I, p. 40.

同じくスピノザ初期の著作『幾何学的な仕方で証明された、ルネ・デカルトの哲学の諸原理、第一、第二巻』には附録として『形而上学的思想』が附加されている。それの第二部第六章は「神の生命について」"De Vitâ Dei." と題されている。その中でスピノザは初めにまずアリストテレスの生命の諸定義を検討したのちつぎのように語っている。「もしも生命が物体的な諸物にも帰属させられるならば、生命なき物は何一つ存しないこととなる。しかしもし生命

が、それの物体〔身体〕に一つの心の結合された諸物にのみ想定されるとすれば、生命はただ人間とそしておそらく動物とにのみ帰属させられることができ、単独の心、あるいは神、には帰属させられることができない。しかし通常『生命』という言葉はより以上広い意味を有っており、従ってそれは疑いもなく、いかなる心とも結合していない物体的諸物にも、また物体から分離された諸々の心にも帰属させられねばならない」*。すなわちおよそ世界に存在するすべての個物は残りなく生命を有すると考えられたわけである。

では、そのように広義に解された生命とはいかなるものか。スピノザは言う。「それゆえ私は、生命のもとに、諸物がそれによってその存在に固執するところの力を理解する。Quare nos per *vitam* intelligimus *vim, per quam res in suo esse perseverant.* ところでこの力は諸物そのものとは異なるのであるから、諸物そのものは生命を有する habere vitam と言うのが適切であろう。それに反して、神がそれでもって彼の存在に固執するところの力は彼自身の本質以外の何ものでもなく、したがって神を生命と名づけた人々は最も正しく語ったこととなるわけである。それゆえ多くの神学者によれば、ユダヤ人は、彼らが誓約する場合、Chaj Jehovah、即ち『生ける神にかけて』と語ったのであった。けだし神は生命であり Deus sit vita、生命と異なるものではないからである」*。

* *Opera* I, p. 260.

そのようにスピノザは、生命のもとに、神ならびに諸物がそれによってその存在に固執するところの力を理解した。その場合、神にあってはこの力は彼の本質そのものであり、従って「神は力である」と言われた。それに反して諸物にあってはその力は諸物と異なるものであり、従って「諸物は力を有する」と言われた。この区別はしかしスピノザの後の見解においては稀薄となる。というのは、右に見られように、『エティカ』においては、「神の力は神の本質そ

のものである」（第一部定理三四）と共に、またあらゆる有限な個物についても、「自己保存の努力は物の本質そのものである」（第四部定理二三の証明）と言われているからである。

シルヴァン・ザックの著に『スピノザの哲学における生命の観念』というのがある。その第一章は「神は生命である」Dieu est la vie である。その中でザックは語っている。

a、神は生命である、なぜなら彼は彼自身の充足と彼自身の力とによって存在するが故に。諸物の第一原因として神は受容的ならざる活動である。彼は本源的かつ無限なる生命である。（中略）。

b、神は生命である、なぜなら彼は純粋活動なるが故に。第一に、彼の内には、アリストテレスの教えたようないかなる潜在性もなく、第二に、彼は、神学者たちの教えるように、一切の受動を排除するところの無限の力、純粋生産性だからである。（中略）。

c、神は生命である、なぜなら彼は諸物の生命なるが故に。（中略）。神に依存するということ、それは神の内に生きることである。そして一つの物は、それがより多くの完全性を有てば有つだけ、それだけより多く存在しかつ活動する、従ってまたそれだけより多くそれは神の生命を表現するのである。（中略）。

d、最後に、神は生命である、なぜなら彼は全体化の原理なるが故に。じっさい、スピノザの神は、同時に一にして全体 l'Un et le Tout である。スピノザによれば絶対的存在 l'Être の統一はすべての諸存在において表現され、神の統一は必然的にその自己充足性と無限性からして派生する、このことを主張するという意味でスピノザ主義は絶対的な一神論である。神は唯一であると語ること、それは「自然の内にはただ一つの実体しか存在せず、そしてそれは絶対的に無限である」（第一部定理一四、系一）と語ることに外ならない。しかし同時に神はまた全体でもあるのであ

る。もとよりそれは集合による全体でもなく、組織による全体でさえもない、かえって神は全体化と組織化との一原理なのである。神は唯一である、しかし神は同時にその諸属性の総体でもある、というのは、種々ことなる存在の諸形態は神の必然性、永遠性、無限性、ならびに生命を表現するからである。（後略）。*

* Sylvain Zac, *L' idée de vie dans la philosophie de Spinoza*, Paris 1963, pp. 24-27.

ザックの著の第三章は「すべての物は種々ことなる程度において生気づけられている」である。この表題の基礎にあたるのは、『エティカ』第二部定理一三の註の中に出てくる、「しかし、すべての物は、異なる程度においてであれ、生気づけられている」"omnia, quamvis diversis gradivus, animata tamen sunt." という言葉である。そこからしてザックは語っている。「神は生命である。神の属性たる延長はそれ自身構成的かつ生命的である。しかし神とそして神を構成する諸属性はそれらの諸様態と不可離である。そこからして、すべての物は神の内に在り、直接神に依存し、従ってまた生命的である、ということが帰結する。この意味においてスピノザは、パウロと共に、すべての物は神の内に在り、神の内に動くことを認めたのである（第七三書簡）。なおまた、その意味で、スピノザにとっては、神に依存することは、神の内に生きることであったのである」。*

* *ib.*, p. 86.

さて、右に見られたように、スピノザによれば、自己の存在に固執するところの力、即ち生命は、およそ存在し活動する一切の物に固有である。我々は通常人間、動物、および植物には生命をみとめても、たとえば一つの石には生命をみとめようとはしない。しかしスピノザから見れば、我々が通常無機的、無生的と名づける一切の個物もまた夫々何らかの仕方で神の力、神の生命を分有し、従ってまた生命的と見られねばならないのである。運動せる物体がそ

の運動状態を固執し、また静止せる物体がその静止状態を固執しようとするのもすべてその中に神の力、神の生命が宿っているからに外ならない。この点についてロスのつぎの言葉は教えるところが多いであろう。いわく、「超越論的な哲学にとっては、物質 matter は内的に見て自動力なきもの inert である。スピノザの語るように、そこでは世界は、運動させられるためには、外から衝き動かされねばならないのである（第八一書簡）。しかし内在論的哲学〔即ちスピノザ的な哲学〕にとっては、死せる物質 dead matter といったものは存しない。能産的自然は所産的自然と一つである。自然は生命的であり、創造的である。活動は自然の中枢そのものから発出する。『神を活動せざるものと思念することは、我々にとって、神を存在せざるものと思念すると同じだけ不可能である』（『エティカ』、第二部定理三の註）。いったい不可分的にして不動の延長はいかにして『諸物の大きい多様性』を発生させうるか、と質問したチルンハウスに対してスピノザの答えたように、神は内的な原因である（第六〇書簡）。運動は物質に『内的』なのである。最近の一つの註釈（A. Wolf, in *Proceedings of Aristotelian Society*, 1926-7, p. 186）はスピノザの延長を物理的エネルギーと同視した、このエネルギーは『運動のエネルギー』と『位置のエネルギー』とを可能とする、それをスピノザは（彼の時代の物理学者と共に）運動と静止と呼んだ、しかし我々は今日それを『運動の』'kinetic'および『位置の』'potential'エネルギーと呼んでいるのである。（中略）。物質の第一の特性は延長的ということである。しかしここにいう延長は自ら運動を生産するごとき延長でなければならない。運動は延長に外から押しつけられるのではない、むしろ延長はそれ自身無限の運動の生ける源泉なのである。それは『外的原因によって動かされる』のを待っているところの『静的なもの』ではない（第八一書簡）。それは世界の生命を一杯に孕んだ生々潑剌たるものなのである」。*

* Leon Ross, *Spinoza*, 前出, pp. 83-4

一一

すべての個物は神の何らかの属性をある特定の仕方で表現する有限様態として何らかの程度において神の力、あるいは神の生命を分有する。その意味ですべての個物、たとえば一つの石、一滴の水さえも生気づけられたもの animata と見られるのである。この世には死物なるものは存しない。その意味でスピノザは世界を「生命の相のもとに」捉えたものと言われてよい。ところで彼によれば、生命とは諸物がそれによってその存在に固執するところの力であった。そこからして自己保存の努力は物の本質そのものと考えられたのであった。

さて、第一部定理三六によれば、「その本性からして何らかの結果の生じないものは一つとして存在しない」。換言すれば、作用的原因として活動しないような個物は一つとして存在しない。右に見られたように、「ウサギや犬や蚊の中にも何らかの程度において神あるいは自然の力は宿されているのであり、それゆえにこそ彼らはそれぞれ彼ら特有の仕方で存在しかつ活動することをうるのである」。静止せる一つの石は無活動的と見られるかも知れない。しかし実はそうではない。静止せる石が静止の状態を固執することのうちにもすでに自己保存の努力が存し、その意味で、いわばその石は静止するという形で活動しつつあるのである。右に見られたように、スピノザが運動と静止 motus et quies と呼んだものは、現代の言葉に直せば運動のエネルギーと位置のエネルギーである。静止せる物を直ちに無活動的と見るのは正しくない。たとえば巨大な城の石垣を見るがよい。そこに層々積み重ねられた一つ一つの石は相寄って大きい城を支えている。もしその内の一つを取り除くならば全体の均衡は破れて城は崩壊するであろう。屋根に葺かれた瓦はたしかに無活動的と見えるかも知れない。しかしそれでもそれは位置のエネルギーを有するのであ

り、それ故にこそ暴風によって吹き落された一枚の瓦は、その下を行く人の頭を打ってその人を殺すこともありうるのである。

要言すれば、存在することは即ち活動することであり、活動することは何らかの結果を産出することである。その意味で存在するすべての個物には多かれ少なかれ原因たるの力が宿っているのである。ところで個物は原因たるの力を有すると共に、それ自身また他の個物によって一定の存在と活動へと決定された結果でもある。その意味であらゆる個物はそれに先行する無限の因果系列の一つの所産者たると共に、またそれに継起する無限の因果系列の一つの能産者でもあるのである。この無限の因果系列の全体は即ち能産的自然に対して所産的自然と呼ばれたものである。さらにそれはさきに（二において）見られた「全宇宙の相貌」（第六四書簡）であり、あるいは「一個体としての全自然」（『エティカ』第二部補助定理七の註）である。あるいはまたそれは八において言及された「自然全体の秩序」であり、「諸原因の秩序」であり、または「諸物の連結」である。この秩序あるいは連結は永遠にして無限であり、従って有限なる一切の個物は永遠にして無限なる世界秩序の中にその一環として一定の位置を占めるわけであり、その限り、それ自身は有限にして可滅的なものでありながら、しかも永遠にして無限なる世界秩序に関与しかつ或る仕方でこの秩序を反映するものと見られねばならないのである。

さて、ここで私はさきに（六において）引用されたフロイデンタールの言葉、即ち「また波は海なしには思惟されえないが、しかし大洋はこの一定の個別的な波なしにも思惟されることができる」という言葉を想起し、そしてそこに若干の疑点を感ずることを告白する。たしかに我々が抽象的に大洋を思惟する場合には、ある一定の個別的な波は十分に捨象されることもできるであろう。しかし例えば私が一九六五年八月二十八日の午前十時という一つの瞬間にお

ける太平洋を思惟すると仮定する。その瞬間太平洋の水面は殆んど無数の個別的な波から成っているのであるが、この波の一つをでも私は捨象乃至無視することができるであろうか。その一瞬間に太平洋岸のある一定の局所に打ち寄せた一つの波は永遠にして無限なる世界過程の一つの必然的結果として、まさにそれが在る通りの形状、まさにそれが有つ通りの力をもってそこに打ち寄せたものと言われねばならない。その波はその瞬間の全太平洋の相貌の一つの部分であり、もしこの一部がそれの実際にあるのと別個の形をとったとすれば、その瞬間の全太平洋が別個の形を取るものと言われねばならない。しかしもしその瞬間の全太平洋がそれの実際にあるのと別個の形を取ったとすれば、その瞬間にさき立つ瞬間の全太平洋がそれの実際にあったのと別個の形を有っていたと考えられねばならない。このようにして無限にいたるとすれば、ある瞬間の一つの波は無限の過去からその瞬間にいたる全世界過程の一つの必然的結果として生じたもの、その意味でその一つの波なしには単にその瞬間の全太平洋が存在しえず思念されえないのみならず、さらにはその瞬間に先行する永遠にして無限な全世界過程そのものが存在しえず思念されえないと言われねばならない。そのことをスピノザは、第一部定理三三において、「諸物はそれが現に産出されたのと異なるいかなる他の仕方によっても、またいかなる他の秩序においても、神によって産出されることをえない」として規定したのであった。また『形而上学的思想』第二部第九章においては、「もし人々が自然の全秩序 totum ordinem naturæ を明晰に理解しえたならば、彼らはあらゆる物がちょうど数学において取り扱われる物と同じだけ必然的であることを見いだすであろう」と語ったのであった（八を参照）*。

* もっとも、さきに（三において）見られたように、第二部公理一においては、「人間の本質は必然的存在を内に含まない。すなわち、自然の秩序によっては、この又はかの人間が存在することもありうれば、また存在しないこともありうる」と言われている。しかしそれは現実の秩序

と異なる他の自然秩序を仮定すれば、という意味であって、現実の秩序をみとめる限りは、存在する人間はどこまでも存在しなければならないのである。

もとよりそうした自然の全秩序を明晰に理解することは有限な我々の知性を遥かに超越した無限に困難な課題である。したがって多くの場合われわれは自然過程――ここにいう自然課程はいわゆる歴史的過程をも小さい一つの部分として含むものである――の必然性の洞察に徹することをえず、多くの個物をたんに「偶然の産物」であるかに思いがちである。しかし個物を偶然の産物とみなすことはそれを「在らざることをも得たもの」と見ることであり、かくて個物からして実在としてのその意義と価値とを剝奪すること以外の何ものでもないであろう。それに反してスピノザは一切の個物を「生命の相のもとに」捉えると共に、また一切の個物を「必然の相のもとに」捉えたのであった。たとえばこの一つの石は決して偶然に存在し偶然にここに在るのではない、かえってそれは世界の必然的な法則にもとづいて永遠にして無限なる世界過程の一つの結果として今ここにこのように存在する、と見たのであった。かく見られることによって、一見何の取り柄もないかのようなこの石は、一つの仕方において永遠なる世界秩序に関与し、かつそれを反映あるいは象徴するものとなるのである。その意味でスピノザは一切の個物を「必然の相のもとに」捉えると共に、まさにそれによって一切の個物を「永遠の相のもとに」捉えたのであった。

必然の相とか永遠の相とか言えば、ひとはあるいは、スピノザの世界像を単に静態的なものと考えるかも知れない。『幾何学的な仕方で証明されたエティカ』といった彼の主著の表題はそうした解釈に我々をいざなうものの如くである。しかしそれは謬まりである。というのは、上来明らかにされたように、スピノザは世界の内なる一切の個物の中に「神の力」Dei potentia、即ち無限に創造的な能産的自然の力をみとめ、かくて世界を動態的、力動的な無限の因

果系列として捉えたからである。一つの個物は過去から現在にかけての無限の因果的関連の一つの必然的所産たると共に、またそれ自身の内に作用的原因たるの力を宿し、かくて必然的な仕方で一つの結果を産出すると共に、この結果はさらにそれ自身原因としてまた一つの結果を産出するのであり、かくて存在するすべての個物は一方過去から現在にかけての因果的関連の一つの終点たると共に、また現在から未来にかけての無限の因果的関連の一つの始点たるものとも見られるのである。従って無限なる知性はおそらく取るに足らぬ一つの個物、たとえば一つの石、一滴の水の内にすら、無限の過去を読み取ると共に、またそこに無限の未来を予料することをも得るであろう。我々有限な知性にとってはもとよりそうしたことは可能ではない。しかしスピノザによれば、人間にとっての究極の目的はそうした全包括的な認識、無限の知性にとってのみ可能な認識へと限りなく高まることであった。『短論文』において「神と合一し神を享受すること*」と呼ばれ、『知性改善論』において「精神の全自然との統一*」と呼ばれ、そして『エティカ』において「神に対する知性的な愛**」"Amor Dei intellectualis" と呼ばれたものはすべてそうした究極的な認識、一切の個物を永遠の秩序のうちに直観するていの認識、の境地を名づけたものに外ならない。

* 拙稿「善について」、同志社法学第八九号四〇頁参照。

** 拙稿「スピノザの神について」（下）、同志社法学第九三号七五頁参照。

「スピノザの体系にあっては世界はたんに一つの現象、現実的実在性がそれに帰属しない一つの現象、として規定せられており、したがってこの体系はむしろ無世界論とみなさるべきである」、ヘーゲルはこのように語った（本稿の冒頭を参照）。わたしは今ここではヘーゲルが現象 Phänomenon と呼んだものとスピノザが様態 modus と呼んだものとの内容上の異同に詳しく立ち入るいとまを有たない。しかしただ一つ明らかなことは、スピノザのいう様態は決

して現実的実在性がそれに帰属しないものではなかったということである。神あるいは自然の或る一定の仕方での表現として神あるいは自然の力あるいは生命を分有し、いわゆる「限りにおいての神」"Deus quatenus" たる性格を有すると考えられたスピノザの個物は、決してヘーゲルの意味での「現象」とは同一視されえぬものと言われねばならない。もとよりスピノザによれば個物はそれ自身一つの実体ではありえずして単に実体の様態であるにすぎない。すなわち個物は「それ自身の内に在り、それ自身によって思念されるところのもの」(第一部定義三)ではなく、どこまでも「他者のうちにあり、かつその他者を通じて思念されるところのもの」(定義五)であるにすぎない。その限りスピノザは個物に対して独立自存的な絶対的存在を拒み、そしてたんに他者依存的な相対的存在をのみ容認したことは疑われえないであろう。しかし古来いかなる哲学者が有限な個々の個物に対して独立自存的な絶対的存在を容認したであろうか。ライプニッツ? しかしライプニッツの単子もまた神の予定調和といった一つのワクにはめこまれたものである限り、なお真に独立自存的とは言われえないであろう。デカルトは個々の物体と精神をも実体と呼びはした。しかしそれはただ精神は物体に依存せず、物体は精神に依存しないという意味でのみ実体と呼ばれたのであって、一切の有限な物体と精神とが絶対的実体たる神に依存し、この神によって「連続的に創造されつつある」ことはデカルトにとってもまた自明の事がらであったのである。

スピノザは個物を実体の様態として規定した。自存的ではなくして依存的であるということ、これが個物の担うべき性格であった。しかし時の内に生まれ、時の内に滅びゆく有限な個物に対して一体それ以外のいかなる存在が附与されることができるだろうか。ヘーゲルもまた「一切の有限なるもの、それは自己自身を止揚するということである」"Alles Endliche ist dies, sich selbst aufzuheben," と語りはしなかっただろうか。* しかしスピノザによれば、神

に依存することは神の内に生きかつ動くことであった。一切の有限な個物は永遠にして無限なる世界秩序の一環として無限の過去を担い無限の未来を孕むものと考えられるのである。神すなわち能産的自然は世界における有限な諸物をはなれて別個に存在し活動し創造するのではない。物言わぬ路傍の一つの石の内にも我々は母なる自然の永遠から永遠にわたる生々潑剌たる活動を看取せねばならないのである。

ところでスピノザによれば人間もまた一つの有限個物に外ならなかった。したがって私の以上述べてきた一切の事がらはそのまま人間についても妥当するのである。しかし同じく一つの有限個物とはいっても、物言わぬ路傍の石と、文化の、学問の、歴史の主体たる人間との間にはやはり一つの質的な差異が存しなければならないであろう。ではスピノザにおいて人間はいかなるものと考えられたか。わたしはいつか機会を得て、スピノザの人間観をある程度まとまった形で述叙することを試みたいとおもう。

* Hegel, *Encyclopädie usw.*, 前出、§ 81.